しと云ふ。

因に云ふ、先年巴里大學の同窓會五十年記念に際し、先生は金貳百フランを寄贈せられたるに、當時同大學に於ても寄附金募集中なりしを以て、先生の送金は誤つて大學寄附金として受領したり、先生之を聞き、復た重ねて大使館を經て、同額を同窓會に寄贈せられたりと云ふ。

且又巴里在學中の先生のノートは、序次整然として洵に鮮明麗美なるのみならず、其の記載せらるる圖面の如きは、實に精緻を極めたりしが、後之を東京帝國大學工科大學土木教室に寄附せられたりと云ふ、蓋し好箇の記念たるを失はざるなり。

第三章　閲　歴

第一節　官　歴

明治十三年十月、先生佛國留學より歸朝せらるるや、同年十二月內務省土木局雇を拜命し、初任月俸金百貳拾圓を給せらる、蓋し異數なり、知る者皆其の優遇を羨望したりと云ふ。翌十四年六月、內務省准奏任御用掛を以て土木局事務取扱を命ぜられ、同年十月文部省御用掛を兼ね、東京大學理學部講師として數學を擔任す。

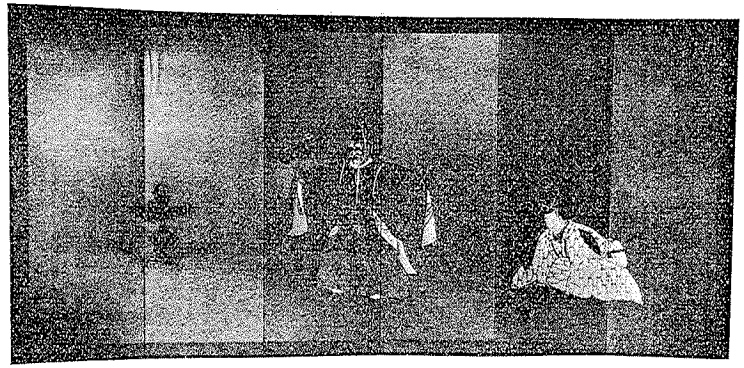
明治十五年、河川治水、港灣修築の事、漸く繁きを加ふるに至れるを以て、同年十一月文部省御用掛の兼務を辞し、爾來專ら土木局直轄工事を監督す。尋で明治十七年七月、內務三等技師に任じ、九月從六位に叙し、十二月、新潟縣在勤を命ぜらる。蓋し其の任、信濃川を始め同地方直轄河川の改修と、北陸諸縣に於ける地方土木工事の指導監督とに在り。居ること一年有半、明治十九年五月、帝國大學工科大學教授兼工科大學長に任じ、奏任官二等に叙し、又帝國大學評議官を命ぜられ、同月更に內務二等技師に兼任し、再び本省土木局勤務となる。其の大學に於ては、河川運河及び港灣

工學を講義せられ、且新設工科大學最初の專任學長として、學部內の統制、學科の整理等に關し、苦心盡力の容易ならざるものありたり。其の內務技師としては、從來蘭人工師の手に委したる土木事業の設計及び監督を邦人の手に移し、又新に土木監督署官制を制定する等、土木事業と相俟ちて土木行政上の畫策到らざるなし。

尋で明治二十一年九月、東京市區改正委員を命ぜられ、其の學殖と經驗とを以て、都市計畫の事に當らる。是より先、山縣有朋公內務卿たり、又當時內務大臣たり、其の內務卿たるの時より、深く意を土木事業に注ぎ、大いに先生の技能に信賴し、先生の人物を敬重せらる。是を以て同年十一月、公の歐洲諸國を巡回するに當り、先生其の隨行を命ぜられ、同時に帝國大學は、歐洲に於ける工科高等學校構成法及び其の學術講習方法の調査を命じ、又東京市區改正委員會は、東京築港に關し、歐洲に於ける最高技術家の意見を聽取せんことを囑託す。既に歐洲に到り各地を巡回するや、先生の流暢なる佛蘭西語は、交際場裡に異彩を放ち、山縣公は爲に幾多の便宜と面目を得て、益々先生を信賴せらるるに至れり、而して先生の各國に於ける調査事項も亦克く其の目的を達せらる。此歐洲出張に當り、先生は工科大學長、並に帝國大學評議官を辭せられしが、翌二十二年九月歸朝せらるるや、十月再び工科大學長に任じ、又帝國大學評議官を命ぜらる。

明治二十三年六月、內務省土木局長に任じ、工科大學長及び教授は兼任と爲り、九月貴族院議員に勅選せらる、實に勅選議員の嚆矢たり。翌二十四年十二月正五位に叙し、同月內務省所管事務政府委員を命ぜられ、爾來每年其の任命を見たり。明治二十七年六月勳四等瑞寶章を賜ひ、同月內務省土木技監に任じ、工科大學長故の如く、都筑馨六氏は先生の後を襲ひて土木局長たり。既にして二十九年二月都筑氏罷め、先生土木技監を以て土木局長を兼ぬ。翌三十年一月、勳三等に叙し、旭日中綬章を綬けられ、同年八月工科大學長を以て高等官一等に陞叙せらる。當時先生後進の爲に道を開くの意あり、大學總長濱尾新氏之を惜みて極力慰留に努められたるが、翌三十一年五月菊池大麓氏の總長たるに及び、同年七月遂に土木技監兼土木局長と共に、工科大學教授兼工科大學長を辭せらる。尋で九月正四位に叙す。

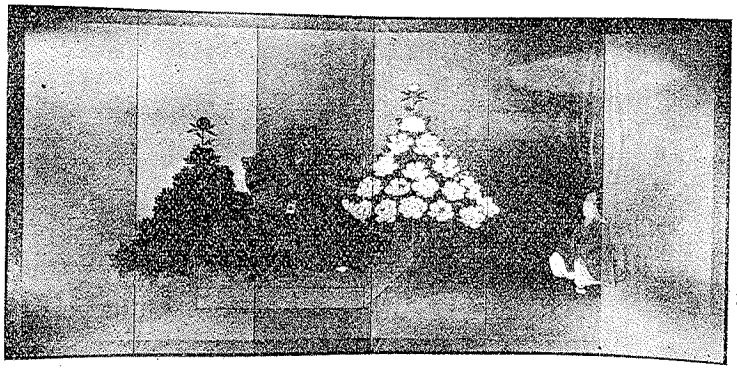
此土木技監兼土木局長を辭せらるるに當り、時の內務大臣板垣退助伯は大いに之を惜まれたるも、先生決意固く、後進の爲に道を開き、遂に退職せられたるが、其の職を辭せらるるや、土木局員其の他相謀り、記念として金屏風を贈呈し、描くに能樂の「翁」及び「石橋」を以てす、蓋し是れ故あるなり。先生の能樂に堪能なるは既に定評あり、而して「翁」は能樂中の最も神秘なるもの、之を演ずるに嚴肅を以てし、精進潔齋して別火たるを要するの秘曲、「石橋」は文殊の淨土に獅子の牡丹の花に舞ひ戯れ、御世萬歲を奉祝する大曲、共に能樂中最高奧傳の曲に屬し、先生の屢舞はれたるものなり、而も高潔なる先生の人格に對し衆望の歸する所、恰も「翁」に敬虔の意を表するが



川端玉章畫伯筆「翁」

如く、同時に祝福の意を現ずべきものを擇びたる所以なり。是に於て「翁」の揮毫を川端玉章畫伯に求む、畫伯一たび能樂の「翁」を觀んと欲す、先生之を聞きて曰く、宜べなり、余自ら演ずべしと、乃ち先生は「翁」、眞野文二博士は「千歳」、丹波敬三博士は「三番叟」を勤めらる、蓋し三博士共同の能樂は、恐らく空前絶後なるべしと稱せらる。玉章畫伯之を寫生したるもの、卽ち右半雙の「翁」にして、左半雙の「石橋」は荒木寛畝畫伯の筆に成り、共に神韻縹緲たるものあり、先生喜びて之を受けらる。

初め明治十三年、內務省土木局に職を奉ぜられしより、今辭任せらるるに至る迄實に十八年、其の土木局長たりしより九ヶ年餘、土木技監たること四年有餘、此間河川治水に於て、港灣修築に於て、其の功績偉大なりしのみならず、從來不備なりし土木法規を改定し、或は新に制定して、土木行政の運用を圓滑ならしめ、歷代內務大臣の信任最も厚く、先生の建言亦概ね採用せらる。而して先生嘗て人に語つて曰く、余は學者に非ず、實業家に非ず、技術者に非



荒木寛畝畫伯筆「石橋」

ず、又行政家に非ず、色彩極めて分明ならざる鵠的人間と稱すべきかと。又曰く、學者本來の希望する所は其の專門を以て終始を一貫するにありと雖、余の如く諸種の方面に關係するを餘儀なからしめたるは蓋し時代の然らしむる所なりと。先生の此言、其の功を誇らざるに出づるも、事實は之を立證するに餘りありて、到る處可ならざるなく、向ふ所適せざるなく、具眼者は皆先生の學者たり技術者としての最高權威者たる以外、更に行政的識見と經綸的才能とを嘆稱したり。

是れある哉、政府は先生の大學及び內務省の要職を辭任せられたる後、僅に十旬餘なる明治三十一年十一月、更に擢んでて遞信次官に任じ、高等官一等に叙し、鐵道局長心得を兼ねしめ、翌三十二年六月、鐵道會議々長を命じ、同三十三年五月、遞信省總務長官に任じ、遞信省官房長を兼ぬ。既にして先生又辭意あり、同年十月願に依り本官及び兼官を免ぜらる。其の遞信省に在ること僅に二年に滿たずと雖、省內の吏僚皆先生の人格と、行政上の手腕とに對し

て、多大の尊敬を拂ひ、先生同省を去るの後も、其の風丰を景仰し、相語つて曰く、先生の力量は優に大臣たるを得べく、或は寧ろ大臣以上たるべしと。凡そ先生の雄才大器、又之を以て窺知するに足るべきなり。

明治三十六年三月、先生復た起用せられて、鐵道作業局長官に任じ、高等官一等に叙せられ、本邦官設鐵道經營の任に當られしが、既にして日露の風雲急を告ぐるに至り、京釜鐵道の速成を要するを以て、同三十六年十二月、先生は休職仰付けられ、同時に京釜鐵道株式會社總裁を命ぜられ、轉じて朝鮮に活躍し、獻身奉公の至誠を捧げて、國家の重大時局に膺り、其の晝夜兼行の努力と、絶大なる手腕と、高潔無比なる人格と、將亦日韓兩國政府の信頼とに依り、僅に一年間にして速成の難事業を遂行せらる。是を以て明治三十八年十月、韓國は勳一等大極章を贈り、同三十九年四月、我政府は特に奏請して、勳一等に叙し瑞寶章を授け、其の功績を旌表す。是より先、勳三等を拜授す、而して今一躍して勳一等に叙せられたるもの、洵に異數の特典なり。

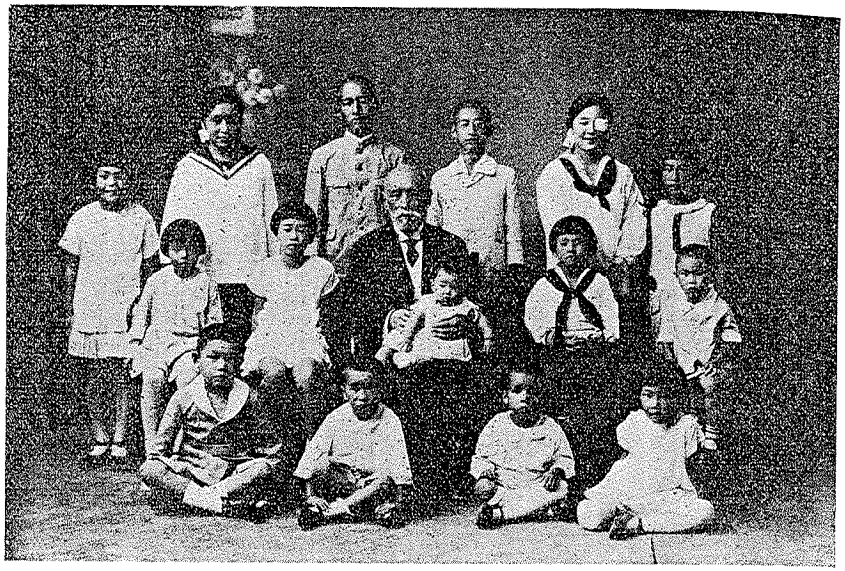
尋で明治三十九年六月、統監府鐵道管理局長官に任ぜられ、七月、京釜鐵道全線の買收引續を了し、更に九月、臨時軍用鐵道監部の所管に屬する京城・義州間、及び馬山・三浪津間の鐵道も統監府への移管を了し、管理局創設後約一年にして、局内の諸事整頓を告げたるを以て、後繼者に委するも顧慮する所なしと認められ、强いて辭任を請ひ、明治四十年六月本官を免ぜられたり。

先生既に官を辭して東京に歸るの後も、東亞鐵道政策に關しては非常に興味を有し、滿鐵の狀況、東支鐵道の關係、朝鮮滿洲露西亞の鐵道聯絡方針、若くは對策等を研究せられたるが、是より先、統監府鐵道管理局長官として韓國に在るの時、南滿洲鐵道會社總裁問題に就きての一挿話あり。明治三十九年六七月の交、先生東京に出でて參謀本部に伯爵兒玉源太郎大將を訪ひ、支那關係事件を談議せられたるの時、談偶々滿鐵問題に及び、伯は先生を推して初代の總裁たらしめんとす、先生辭して曰く、滿鐵の經營は單なる鐵道問題に非ず、日露戰役の結果、日本が莫大なる血稅を拂ひて獲得したる利權に對し、百年の長計を樹てざるべからず、是れ實に國家的永遠の大事業にして、余の如き本來一介の技術家出身者の出現すべき舞臺に非ず、且克く幾多の覇氣に滿ちたる人士を頤使するの力量あるに非ざれば總裁たること能はず、故に余之を辭す、而して更に人を推薦するは其の分に非ずと雖、余の見る所を以てすれば、滿鐵初代の總裁は後藤新平君を措きて他に適任者なかるべし、但し後藤君今臺灣に在り、其の轉任は果して臺灣經營上如何なるべきかは余之を知らずと。兒玉伯之を聞きて唯頷くのみ、何等其の可否を答へられざりしも、意茲に決する所ありしものの如く、直ちに電報を以て後藤伯を東京に招致し、滿鐵總裁たらんことを勸む、後藤伯稍躊躇する所あり、將に明日を以て確答せんとす、而して其の前日卽ち明治三十九年七月二十三日、兒玉伯突然腦溢血を以て薨去せらる、後藤伯以て終生の恨事とす、然れども遂に初代の總裁に就任す。後

日滿鐵の經營其の緒に就くに及び、先生滿洲に赴きて各方面を巡視し、從來研究せられたる所と相俟ちて、滿鐵の將來に關する意見を後藤總裁に述べ、以て參考に供せられたるが如し。爾後先生常に家人に向つて曰く、余が生涯に於ける行實に二個の善事あり、一は學術研究會議に對して　皇室の御下賜金を拜受したること、一は滿鐵總裁を辭したること是れなりと、蓋し滿鐵總裁の辭任は自ら先見の明ありしを告白せられたるなり。而も兒玉伯が先生の就任を慫慂せられたる所以のものは、先生が單なる技術家に非ずして、政治的實際の識見手腕を具備せらるるを認識したるに依るなり。

大正三年六月從三位に叙し、同八年十二月勳功に依り特に男爵を授けらる。先生　聖恩の優渥なるに感泣せらるゝと共に、是れ亦古市家祖先以來の擁護の然らしむる所なるを思ひ、翌九年三月三日、祭壇を澁谷常盤松の邸内に設け、始祖左近將監景治以下中興の祖玄政、並に考妣の神靈を齋き、神道大教正平田盛胤氏を齋主として、授爵奉告祭を行はる、平田齋主の祭詞左の如し。

是の奥床を假の齋場と搔き拂ひ淨め裝ひて、靈璽作り備へて、暫招き鎭め奉る、是の古市の御家の遠つ御祖神等を始めて、是の御家の中つ世の御祖神と仰ぎ尊み奉る古市ノ玄政大人ノ命、及今の家主の君の父君と坐しし古市ノ孝大人ノ命、母刀自と坐しゝ古市ノ清子刀自ノ命等の神靈の御前に、齋主大教正平田ノ盛胤、謹み拜みも宣り白さく。あわれ御家はしも、舊の姫路藩士に坐しけるに、玄政大人命は、既く長崎に物して、唐土人に就きて醫の道の



昭和五年喜壽の賀宴に於ける孫集・中央は古市先生

蘊奥を究め給ひて、世の人皆を助け給ひ救ひ坐しし功勳いと尠からざりしに、元祿の二年といふに、現世を去り坐ししかば、今年は百三十二年に當れり。孝大人ノ命は、舊の姫路藩士にして、いち早くも西洋の兵式を採り用ゐ給ひて、當時農兵を募りて、西洋の兵式に依りて訓練し給ひしに、明治の大御代の初に在りて、藩の兵を率ゐ給ひて、大阪に出で向はして、種々舊の藩主の御爲に、勞き給ひ盡し坐しけるに、去にし明治十二年といふに、身退り給ひしかば、今年は百四十二年に當り、夫人清子刀自命は、一世の限、夫の君を輔け翼なひ坐して、御家の政を能く整へ能く理め坐しつるに、身失せ坐ししより今年は九年になも當れりける。あはれ〳〵古への歌に、代々の祖の、御蔭忘るな、代々の祖は、おのが氏神、おのが家の神、と詠めりしが如く、世の人皆の、今の我が身の如く是在る事は、掛けまくも畏き我が天皇命の大御稜威に依

れるは、申すも更なれど、又代々の御祖神等の廣き御蔭、深き御惠に依れる事なれば、誰かその御蔭を忘れてあらむ、誰やし人かその御惠を思はずてあらむ。然はあれども、現世に在り經る間は、高き賤しき程々につけて、日々執る事業のいと繁き物にしあれば、心には思ふものから、世々の御祖神等の神靈をば、得齋き治め奉りあへぬ大方の世の慣ひなるに、然はあらずて、御祖神等諸〳〵の御前を持ち齋き坐しけるは申すも更なり、常に御祖神等諸の御心を心として、露その御心に違ふ事なく、背く事なく、尊く嚴しく仰ぎ給ひ守り坐しつれば、樛の木の彌繼々に榮え給ひて、今の家主の君の何怜御名は、天の下に鳴神なす轟き響かひ、露隱れなきばかりになも成り來にたる。そも家主の君はしも、幽冥ながら見知食すが如く、既く開成所に入り坐しけるに、官の命を蒙り坐して、學の道の爲に佛蘭西の國に物して、學の道の奥處をたどり坐しつれば、同じき國の農商務省、又文部省より、いとも尊き學の御位をさへ授けられ給ひ、後是の御國に歸り來ましては、あるは工科大學教授、工科大學長 あるは土木局長、土木技監、あるは遞信次官、あるは鐵道作業局長官、あるは統監府鐵道管理局長官などの諸官に任され坐して、長き歳月が間、我が邦工業教育の爲に、あるは土木行政の爲に、種々勤はき給ひ勞き坐しし功勳は、不盡の高嶺と高く、その山に降れる白雪と著く坐しける事は、人皆の知れる處になも在りける。故早く工學博士の學の御位を授けられ給ひ、又貴族院の初より今の現に至るまで貴族院議員となり給ひ、あるは東京帝國大學名譽教授、あるは帝國學士院會員、あるは帝國學士院第二部部長などに擧げられ坐しし更にも言はず、その他公に私にありて、あるは委員委員長、あるは顧問、あるは會長、あるは所長社長、あるは總裁などに選ばれ給ひ推され坐しし事等は、得計へ盡すべくもあらず。如是年まねく世の爲、國の爲、帝室の御爲に、勤み給ひ勞き坐ししかば、既く御位は從三位に、御勳は勳一等にさへ進み坐しつるに、去年の十二月二十七日といふに、畏くも特なる大命以ちて、男爵を授けられ、華族の列に擧げられ坐しけるは、全く我邦工業界に盡し坐しし報とは言へ、掛けまくも畏き天皇命の大御稜威に依れるは申すも更なれど 又朝夕におのが氏神、おのが家の神と持ち齋く世々の御祖神等を始めて 父母の君の夜の守、日の護りに守り幸はへ給へる恩賴と尊み畏み辱み嬉み思ひ奉り給ふが故に、その由を告げ奉らむとして、舊き新しき暦の差別こそあれ、今日はも玄政大人ノ命の元祿の二年三月三日といふに、現世を避り坐しゝかば、八十日日はあれど、今日を吉月の吉日と擇び定めて、清き赤き眞心以ちて、家主の君を始めて、親族家族等諸、是の御前に、い群れ列りて、禮代の御酒に御饌に、海川山野の物等を捧げ供へ奉りて、皇大御國の大御手振の式のまに〳〵、御祭典廣く厚く仕へ奉らす事の狀を、平けく安けく聞食して、今も將來も、御家の門は富士の高嶺の彌高々に、御家の系統は刀根の川水淺せず絶えせず、末の瀨までも濁る事なく、子孫の八十連續、彌遠永に榮え往かしめ給へと、細枠中執り持ちて、謹み敬ひも告げ奉らくと白す。

尋で大正十三年一月樞密顧問官に親任せらる。是より先、山縣有朋公樞密院議長たるの時、公の胸中夙に先生を樞密顧問官に推薦するの意ありしが如きも、未だ其の機を得ざりしに、公の先生を信賴せらるゝの久しきと同じく、男爵濱尾新氏の先生を敬重するは亦一朝一夕の事に非ざりしを以て、濱尾男の樞密院議長たるに及びて、遂に推薦せられたるものなりと云ふ。越えて昭和二年十二月正三位に敍し、同四年一月旭日大綬章を授けられ、翌五年七十七歳を迎へらる、而かも矍鑠壯

者を凌ぐものあり、是歳喜壽の賀宴を自邸に開かれ、兒孫皆集ひ來りて嬉々たり。同七年十二月從二位に陞叙せられ、同八年一月八十歳の高齢に達したるを以て、御紋章付銀盃並に酒肴料を下賜せられ、又特に宮中杖を差許さる。是より先、先生「米壽九十は及びもないがせめて八十鳩の杖」てふ追分節の戯作あり、早く八十歳の壽齢に達して所謂鳩杖を許さるるを待たれたるが、今其の望みを達するを得て、先生の欣快極まりなかりしと云ふ。

昭和八年古市先生八十歳を迎へ宮中杖を差許されたる當時の撮影

是歳疾に臥し、翌九年一月二十八日其の疾革るや、特旨を以て旭日桐花大綬章を授けられ、是日竟に薨ず、享年八十有一。七男三女あり、長男六三氏嗣ぐ。

第二節　事蹟の梗概

先生幼にして神童と呼ばれ、姫路藩の貢進生として大學南校に入り、選拔せられて文部省第一回留學生と爲り、佛蘭西に留學し、拔群の成績を以て「エコール・サントラル」及び巴里理科大學を卒業し、日本學生の聲名を高からしめ、工學士理學士の兩學位を得て歸朝し、明治十三年内務省に奉職せられしより、昭和九年薨去に至る迄の官歴は前節之を述べたり。今乃ち其の官歴に伴へる事蹟と、工學及び工業に關する幾多の功勞とを略叙し、以て先生の全貌を窺はんとす。

先づ之を教育家としての先生に見るに、帝國大學令發布と共に、帝國大學工科大學教授兼工科大學長と爲り、當時困難なりし學部内の統一を圖り、本邦最高學府に於ける工學教育の基礎を定め、且其の深遠なる學識を學生に授けて人才を養成し、又其の精神的に懇篤熱誠なる指導は、幾多の卒業生をして工學及び工業界の重鎮たらしめ、更に下級技術員を養成せんが爲に、工手學校の創立發起人と爲り、同校管理長として多年盡瘁せらる、工手學校は現今の工學院にして、既に二萬有餘の卒業生を出し、我工業界に貢獻する所頗る大なるものあり。又東京佛學校を起し、之を擴張して和

佛法律學校と爲し、法律の研究と共に佛蘭西學を修得せしめ、佛國文化を我國に普及せらる、同校は卽ち現今法政大學の前身なり。此他內閣及び文部省より、高等教育會議々員、東京工業學校商議員、臨時教育會議々員を命ぜられ、其の臨時教育會議に於ては、特に金杯壹組を賜へる等、功勞頗る顯著なるものあり。

學者としての先生は、明治二十一年五月、本邦に於ける最初の工學博士の學位を受け、後工學博士會々長となり、又勅旨を以て帝國學士院會員を命ぜられ、其の第二部々長として科學の發達を圖り、教化を裨補せらるる所頗る多く、學術研究會議の創設に當りては、其の會長として科學及び之れが應用に關し、內外に於ける研究の聯絡統一を圖り、並に其の研究を促進奬勵せられ、更に理化學研究所長と爲り、自然界及び科學界の神秘を開きて之を實地に應用せしめ、以て新工業の發現を見るに至り、本邦科學界の泰斗として推重せられ、其の他震災豫防調査會、航空研究所の設立に盡力せられたる等、一々枚擧するに遑あらず。更に學者の本領としては、勅旨に依り東京帝國大學名譽教授の名稱を授けられたるが如き、名實共に斯界の第一人者として仰がるる所以なり。

行政官としての先生は、其の功績、內務遞信兩省及び朝鮮統監府に亙り、我國工學界の最大權威者たり最高技術家たる力量に加ふるに、他の匹儔を許さゞる行政的手腕を發揮せられたり。殊に明治の初期內務省に於て外人の手に委ねたる河川港灣修築の設計及び監督を邦人の手に移すや、新進氣鋭の先生之れが統率の任に當りて指導其の宜しきを得、治水工事に在りては高水除害の方針を確立して、信濃・木曾・淀・筑後等の諸川に着手し、地方工事に在りては、横濱・大阪・小樽等重要港の修築、及び東京・大阪兩市の水道等を起工し、更に全國重要なる河川港灣に對し、根本的の調査測量を行ひ、改修の範圍及び順序を定むるの基本となし、行政上法規の運用に關しては、從來不備なりしものを統一整理し、又新に河川法、砂防法等を制定し、以て本邦治水政策の基礎を確立せられ、或は土木監督署官制を改正し、重要なる地方土木工事統制監督の實を擧げ、其の改善を促し、又濃尾大震災及び連年の地方水害に對し、復舊改良費國庫補助の途を講じて、地方災害を救濟する等、孰れも皆行政官として將た技術家として、國家百年の大計を樹立せられたるものにして、其の偉大なる功績は蓋し稀に見る所なり。且夫れ朝鮮統監府鐵道管理局長官としては、朝鮮に於ける全部の鐵道を管理局の下に打つて一丸と爲し、從來の諸規程を改正統一し、以て交通運輸上永遠の基礎を確立せられたるの功、洵に赫々たるものあるなり。

民間事業に關しては、日露戰役に當り京釜鐵道會社總裁と爲り、同鐵道速成の重責を完うして、非常時の軍國に貢獻せられ、又東京地下鐵道會社々長として、本邦最初の地下鐵道事業の基礎を固め、更に東亞鐵道研究會理事長として、或は東亞興業會社々長として、共に支那の開發に努力せられ、其の他水力電氣に關する幾多の會社に對し、顧問又は重役として指導の任に當られたる等、內

外土木事業の發達を促進せしめられたること尠からず。

一般産業に關する方面に在りては、第三回、第四回、及び第五回內國勸業博覽會に於て、並に審査部長として拮据精勵せられ、其の功勞顯著なるを以て、特に藍綬褒章及び飾版を賜ひ、又臨時博覽會、日本大博覽會、日英博覽會等の評議員と爲り、或は桑港萬國博覽會に盡力し、其の功に依り銀杯壹組を賜ふこと二回に及べる等、本邦工業の進步發展に寄與せらるる所頗る多し。

又工學に關聯せる各種の調査會に於ては、先生は斯界の第一人者として、委員中必ず其の名を列せられざるはなく、土木會、東京市區改正委員會、臨時治水調査會、道路會議、鐵道國有調査會、廣軌鐵道改築準備委員會、鐵道會議、震災豫防調査會、製鐵事業調査會、議院建築準備委員會、度量衡及工業品規格統一調査會、臨時電氣調査會、中央衞生會、足尾銅山鑛毒事件調査會、帝都復興院評議會、港灣調査會等、或は議員たり、委員たり、又委員長として主宰せられ、先生の意見は常に衆議の重要視する所となれり。

學會協會等に關しては、工學會副會長及び會長に重任せられ、社團法人日本工學會として組織變更の後は、理事長として終始せられ、又土木學會創立第一回の會長として就任し、其の名譽會員に推選せられ、或は日本動力協會々長、港灣協會副會長、帝國鐵道協會副會長及び名譽會員たるの外、學士會創立者の一人と爲り、又日本ローマ字會理事、萬年會理事長たる等、多數の學會協會に關係せられざるはなく、斯界の元勳として名聲嘖々たり。殊に晩年世界的權威者を網羅せる英國土木學會及び米國土木學會の名譽會員に推選せられたるが如きは、國際的に先生の技倆と名譽の反響に外ならずと謂ふべし。

先生の政府委員として帝國議會に臨むや、議案の說明、質問の答辯、共に叮嚀懇切を極め、議員を滿足せしめたり。卽ち淀川其の他內務省直轄河川改修費、並に東京其の他重要都市の水道費、大阪築港費、及び各府縣災害復舊費の國庫補助金要求に當り、其の說明諄々として詳細を盡して漏す所なく、此等國庫補助金と地方戶數割との比例に關する質問に對しては、戶數割高く民力其の負擔に堪へざるが故に補助するに非ず、事業その物が大工事にして負擔重きが爲に補助するなりとて、補助の性質を明にし、又韓國鐵道に關する質問に對し、京釜・馬山・京仁・京義の各線に涉り詳細に說明せられたるが如き、孰れも胸襟を開きて應答し、何等蟠りなき態度を示されしは、議員をして釋然たらしめし所以なり。嘗て河川改修費追加豫算の審議に當り、議員は追加工費の過大なるを非難し、當局者に信を置くべからずとして攻擊質問の矢を放つものあり、先生之れに答ふるに工事費金壹千萬圓の巨額に達し、而も八年計畫十年計畫と言へるが如き大工事に在りては、時世の變遷、物價の異動に依り、百萬圓若くは貳百萬圓の差違を生ずるは强ち怪むに足らず、且之を技術上より見るも亦決して牴牾あるにあらず、然るに之を攻擊するが如きは全く素人の言說にして、當事者の

首肯し得ざる所なるを以てせられしが、此率直にして天眞爛漫なる答辯は、人をして却つて敬意を表せしめ、辯論の雄を以て任ずる議員も、其の儘に豫算を承認するに至れり。若し先生以外の人にして斯かる無遠慮なる言辭を放たば、恐らくは問題を惹起したるべきなり。

先生の貴族院議員たるや久し、此間殆んど連年豫算委員に擧げられたるが、其の所屬分科は概ね內務文部の兩省を主とし、兼ぬるに農商務遞信の兩省を以てし、稀には關東都督府及び帝國鐵道の特別會計豫算委員たることありたり。明治三十五年第十六回帝國議會に於て、高等小學の二年卒業生と進んで中學に入る者の比例、及び中學卒業生と進んで高等學校を志望する者との比例を質問せられたるが如きは、先生の教育上に關する注意を窺ふに足るべく、更に明治四十五年第二十八回帝國議會に於て農商務大臣に對し、經常費に加ふべきものを臨時部に編入したる違法を指摘し、經常部の森林費と臨時部の國有林野經營費、並に治水事業費との三者の關係連絡を明瞭ならしめよと請求し、更に今次の支那動亂の爲に貿易上の影響を調査するは勿論、事變鎭靜後の調査も亦必要なるを以て、今より之に對する準備あるべしと促し、且今次の動亂を以て日本商品粗製濫造の弊を招來せるは、實に一大禍根を將來に貽すものなりと慨せられ、更に支那貿易のみならず、輸出上少しく好況を呈すれば、商工業者は目前の利に趨りて、忽ち粗製濫造に流るゝが如きは、政府に於て嚴に制遏を加へざるべからずと力說せられたるが如き、凡そ國家の爲に憂ふる所は、忌憚なく其の意見を披瀝せられたり。

大正十三年一月樞密顧問官に親任せられたる後、屢々審査委員に擧げられ、又委員長となりて、御諮詢に奉答すべき問題を精査せられたり。而して會議に當り、顧問官中或は熱誠激論を生じ、或は他を苦しめんとするが如き言辭なきに非ず、斯かる場合先生の一言克く議場を靜肅ならしむることあり、人之を先生の警句と稱す。然り警句と稱するも或は可ならん、然れども先生は極めて常識に富み、其の判斷正鵠を失はず、從つて所說亦頗る穩健にして、努めて議論を避け、毫も激越なる言辭を用ひられず、而も終局の歸着點に到達せしむる鍵鑰を握り、先生の一言は能く衆議を融和して、結論に導くの誘因たりしと云ふ。

更に國際關係に於ては昭和四年萬國工業會議及び世界動力會議を東京に開催するに當り、秩父宮殿下を總裁に仰ぎ奉り、先生七十六歲の老齡を以て之れが會長として終始盡力せられ、我國の工學及び工業の發達を世界に紹介すると共に、國際間に於ける產業上の協調を促し、且東西兩洋技術家の親交を深からしめ、進んで將來の提携を期すべく一大成功を收められたるは、實に特筆大書すべき掉尾の偉業と謂はざるべからず。更に佛國との關係に於ては、日佛協會を起して、兩國民の和衷協同を圖り、其の交歡に勉められたる外、或は日佛學者の交換教授に依りて、兩國文化の連絡を深うし、終に今日の日佛會館の創設を見るに至りたるが如き、數十年間日佛關係の中心人物とし